

当美術館アプリ「Musée de la Toile de Jouy / la Manufacture」(英語・フランス語版)を無料でダウンロードされてはいかがでしょうか? 衣服や室内装飾、家具や壁用の布として使われていた“トワルド・ジュイ”。美術館に関する情報が検索したり、スマートフォンやタブレット上で布地を拡大して間近で鑑賞することもできます。

トワルド・ジュイ美術館 連絡先:

Musée de la Toile de Jouy
Château de l'Églantine

住所: 54, rue Charles de Gaulle, 78350 Jouy-en-Josas, France

電話番号: + 33 (0)1 39 56 48 64

E-mail: museetdj@jouy-en-josas.fr

当美術館サイト:

www.museedelatoiledejouy.fr

トワルド・ジュイ美術館友の会サイト:

www.amisdelatoiledejouy.fr

FACEBOOK:

<https://www.facebook.com/MuseeToiledeJouy/>

トワルド ジュイ美術館

日本語ガイド



当美術館の紹介

ジュイ・オン・ジョザス市は、トワル・ド・ジュイ工場の遺産を世に広めることを目的として、1977年に当初「オーベルカンフ美術館」をモンテベッコ城の一階に創設する。“ジュイの布”を意味する“トワル・ド・ジュイ”は、1760年に、先見の明があった企業家クリストフ＝フィリップ・オーベルカンフ（1738-1815）によって、ここジュイ・オン・ジョザス市で生み出された。美術館のさらなる発展のため、1991年にエグランティーヌ城に移転し、新たに「トワル・ド・ジュイ美術館」と命名される。

今日、当美術館は、8000点以上のコレクションを収蔵しており、常設展示では、ジュイ工場の歴史・18世紀から19世紀にプリントされた数多くのコットン布地を展示し、定期的に様々なテーマに基づいて企画展を開催している。

現在の美術館の建物は、1891年頃にオーベルカンフの協力者の子孫である建築家アルフレッド・ヴォドワイ



「ジュイ工場の店の前に立つオーベルカンフ」ナタリー・ラブシェール作。1854年。グワッシュ

エ（1846-1917）によって建てられる。美術館前の庭園では、花壇が帯上に配置されているが、その様子は“トワル・ド・ジュイ”が製造されていた当時、ジュイの布を漂白する際に草地一面に広げられていた、色鮮やかな風景を表すようにデザインされた。

美術館には、フランスで最も歴史のあるミュージアムショップ“ブティック・オーベルカンフ”も併設されている。“トワル・ド・ジュイ”のモチーフ（模様）をもとにしたオリジナルグッズは、フランスの職人やアーティスト達が、美術館のために特別に企画開発している。ジュイのモチーフを使用したバッグやエプロン、アクセサリなどが扱われ、プレゼント探しにも最適である。また、日本で2016年に、文化村（Bunkamura）・ザ・ミュージアム、郡山市立美術館で開催された企画展「西洋更紗トワル・ド・ジュイ展」のカタログ（日本語）も販売している。

◆ 当時は、まだ自治体による社会保障は存在しなかった。教会による支援があったが、不十分であった。ジュイの工場は、雇用者だけでなく、地域の貧困者にも医療を提供した。また、数多くの死者を出した天然痘の予防接種のキャンペーンも行った。

こういった彼のイニシアティブは、社会保障の始まりであり、フランスでは19世紀後半になってやっと法律で定められるようになる。

現代に通ずる革新的人物

1864年にパリ市議会は、メニルモンタン地区にある通りと、地下鉄の駅に、オーベルカンフの名前を命名した。

オーベルカンフの価値観・社会的姿勢は、驚くほど現代的である。：

◆ 企業家精神：移民労働者に過ぎなかった彼が、すべての困難を乗り越えて、一大企業を築き上げた。

◆ 創造的エネルギー：機械や化学の革新的な知識や技術を利用して、装飾芸術を豊かで幅広いものとした。

◆ 社会意識：時代を先取りした社会政策を経済的効率と両立させた。

◆ 忍耐力：自身に誠実であった彼は、7つの政治体制のもとで生涯を送る。ルイ15世に始まり、ルイ16世、フランス革命、総裁政府、執政政府、そして第一帝政、ルイ18世の王政復古と続いたのである。

◆ 信念：彼にとって、中心となる信念は、起業家精神、彼自身の言葉で言うなら、すなわち「他者のために、他者とともに行動する」ことであった。今日の基準から見ても、彼は倫理感あふれる起業家だったといえよう。

クリストフ＝フィリップ・オーベルカンフは、1815年10月4日に75歳で逝去する。彼は、今日でも新鮮に感じられる、豊かで幅広い数々の作品を残した。





「ジュイ・オン・ジョザス工場」ジョン＝パティスト・ユエ作。
1807年製作。油彩画。



ーフを生み出すためには、最も有能な画家達、ジョン＝パティスト・ユエ、ルイ・ジョン＝フランソワ・ラグルネ（1725–1805）、ルイ＝イポリット・ルバ（1782–1867）等にデザインを依頼する。

オーベルカンフは、完璧主義者で、丁寧な仕事を好んだ。彼は、大量生産するよりも、最高品質の製品を提供することを望んだ。彼は控えめな性格であったが、企業発展のために努めて宣伝広告活動に励んだ。ルイ16世の主要な大臣達や、王妃マリー・アントワネットとその子供たち、皇后ジョゼフィーヌとマリー・ルイーゼなどの要人がジュイを来訪した。1806年のナポレオン1世の訪問の際には、皇帝がオーベルカンフにレジオン・ドヌール勲章を授ける。ジュイ工場は、フランス第三の一大企業に成長し、その名は世界中にとどろき、この工場でプリントされた布は海外の17以上の都市に、そして、あらゆる宮廷に売られたのである。

社会的先駆者

オーベルカンフの仕事は、社会事業としても捉えることができる。彼は当時としては、非常に具体的かつ革新的な措置を講じる。例えば：

- ◆ 労働者が住居を購入したり建築しやすいうちに、ごく低金利の債券（ローン）を提供した。彼らは無理のない形で返済でき、工場で残業することで返済に充てることもできた。
- ◆ 金銭的に困っている労働者には、金利なしでローンを提供した。
- ◆ 職業研修を実施した。12歳から14歳までの若者が8年間契約で、有償で研修を受けることができた。ナポレオンが公立学校を創設する1800年以前に、こういったシステムがあったことは、画期的なことであった。
- ◆ 病気の際にも、労働者は賃金を保証されていた。

見学順序

2階：最初の展示室は、階段をあがり右側から。

1階：展示の続きは、階段を下りて右側から。

1760年から18世紀終わりのジュイ：

ジュイ工場が一番多くプリントされたモチーフ（柄）は、花柄模様である。それらの花々は、アンディエヌ布（インド更紗）やペルシャ布、または、植物図鑑などから影響を受けた。柄は、写実的なものもあれば、様式化された場合もあった。また、単体のものもあれば、花束のようにまとまって表現される場合もあった。花柄以外には、異国趣味や中国趣味（シノワズリ）といった当時の流行の影響を受けたものもあり、衣服や室内装飾に使用されていた。

18世紀終わりから

19世紀初期のジュイ：

「ラモヌール地（煙突掃除人）」または「グッド・ハーブス地（素敵な草花の意）」と呼ばれ、暖炉の煤のように暗い地に小さな花々が散りばめられた柄は大流行した。と同時に、当時の政治的出来事や文学から人物柄が多く生まれた。18世紀後半は、フランス革命にも影響を与えた哲学者ジャン＝ジャック・ルソー（1712–1778）が自然回帰を説き、その影響から、ジュイ工場でも、単色の牧歌的風景や田園風景のモチーフが生まれた。それらは、主に白地の背景に赤か青の単色でプリントされ、特に、才能ある画家、ジャン＝パティスト・ユエ（1745–1811）が、筆頭デザイナーとして、このような田園風景の下絵を提供したことが、「トフル・ド・ジュイ」の名前に大きく貢献した。

19世紀初期、第一帝政期のジュイ：

19世紀初期になると、古典柄が流行し、格子縞か鱗模様を背景に、新しい色調である暗褐色や紫の布地が生産された。銅版ローラーでプリントされた「ミニオネット」と呼ばれる小さな反復模様の布でたくさんの衣服が作られ、大成功をおさめた。

オーベルカンフのサロン：

再現されたオーベルカンフの広間の壁は、当美術館で保存されているジュイ工場の古いデッサンをもとに、再プリントされたアンディエヌ布地（インド更紗）が張られている。家具は、オーベルカンフが実際に使用していたものである。

歴史に関する展示室：

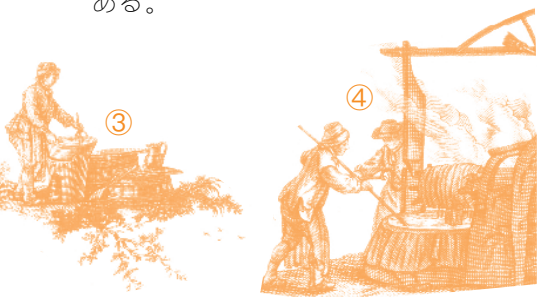
1760年創設のジュイ工場は、ヨーロッパ最大の布地染色工場で、1805年には1300人以上を雇用していた。しかし、1843年に、政治・経済体制の変化、流行の変化、他の染色工場との競争、オーベルカンフの逝去などが原因で、工場は閉鎖された。その20年後に工場が壊されてからは、オーベルカンフの最初の住居であったボン・ド・ピエール館と、その後、彼が家族とともに住んだ住居（現在のジュイ市庁舎）が残るのみである。

トワル・ド・ジュイのプリント工程

① - 束にした白布の棹打ち：ビエール川の川床で、加工前の布地を水に浸して洗い、その後、棹打ちした（この工程は、19世紀初期には機械化）。その後、布のざらつきを取り除くのに、布をローラー式の光沢機にかけた。



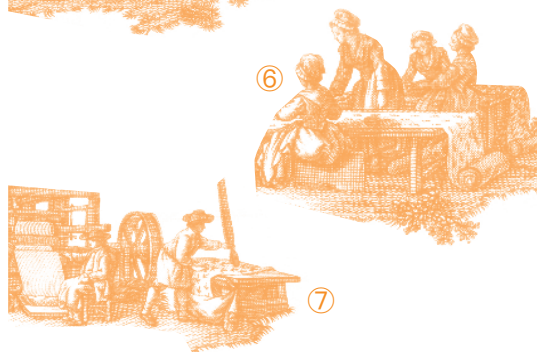
② - 媒染工程：木版、銅版、銅版ローラーで布地に媒染剤を使用してプリントする。媒染剤は、金属塩や酸化アルミニウムを原料としており、後工程で染色する際に、光や洗濯にも耐久性のある色を染色するのに必要なものである。



③ - 牛糞処理：次に布地を、牛糞を混ぜたぬるい温度の溶液に浸す。これによって、媒染剤が過剰についた場所を取り除き、その後、洗濯する。



④ - 茜染め：次に布地をアカネの根を原料とした赤の染料に浸す。媒染剤に反応して、赤、ピンク、紫、茶、黒などの色が表れる。



⑤ - 地の部分の漂白：前工程で赤みがあった布を漂白するために、草地に布を広げ、繰り返し水を流す。



⑥ - 木版や筆で他の色の塗り付け：青（藍色）や黄色（モクセイソウやコナラ科のケシトンといった植物由来の染料）。緑は青と黄色を重ねて染色していたが、1806年以降は、技術の進歩により、緑も一度で染色可能となる。



⑦ - 艶出し加工(チンツという)：ロウとデンプン糊を塗布し、熱された光沢機にかけ、ビー玉やクリスタルガラスで磨いて艶を出す。



「工場の仕事」1783年製作。ジュイ・オン・ジョザスのオーベルカンフの工場で、銅版でプリントされたコットン地。トワル・ド・ジュイ美術館所蔵。



ていたオーベルカンフにとってチャンスとなった。

オーベルカンフは、ビエール川を遡ってパリから20kmのジュイ・オン・ジョザスに移ることにした。そこには、敷地と水が豊富にあり、近くには重要な買い手であるヴェルサイユの宮廷があった。彼は、ポン・ド・ピエール館（石橋の意）と呼ばれる慎ましやかな家に落ち着いた。ちなみにその家は、現在音楽学校となっている。彼は、まずは染色用のテーブル一台で始め、その上で寝た。まったくお金がなく設備は借り、資金を有する共同経営者を取らざるを得なかった。1760年5月1日曜日、彼は自らの手で1枚目の布地をプリントする。まさしく、トワル・ド・ジュイ工場の誕生の瞬間だった。

比類なき企業家

オーベルカンフの周囲は、敵ばかりだった。彼は、慎ましい庶民階級の出身であり、しかも外国人でプロテスタント教徒でもあった。当時のフランスは絶対王政下だが、数々の障害を乗り越え、彼は少しずつ工場を大きくしていく。ルイ16世により、1783年6月19日、ジュイ・オン・ジョザスの工場は王立工場の地位を与えられる。工場は、ビエール川流域全体14ヘクタールに渡っていた。最盛期には、約1300人の労働者が、36以上の建物の中で働いていた。一番大きな建物は、側面が110メートルに渡り、342の窓から明かりを得ていた。工場内は労働者がひしめき、まるで働き蜂が忙しく動きまわる巣箱のようで、いろいろな機械が作動する音で、中はとても騒々しかった。

年を追うごとに、機械の性能は、段々と高まっていき、当初6か月要した銅版の行程は、最短6日にまで短縮する。また、銅版ローラーでプリントすることによって、42人の工員を削減することができた。布地を漂白するための回転式ドラムは、手動ではなく水力で作動することができた。ジュイ・オン・ジョザスは、あちこちで布地が吊るされていたり、広げられていたため、色とりどりで、まるで巨大な看板のように遠くからも見ることができた。

プリント生地の完成形に至るまでには、10工程以上ある。鮮やかな色を確保するために、34を下らない種類のさまざまな鉱物や植物が必要だった。オーベルカンフは、プリント技術改善のためには、最高の化学者達、シャプタル（1756-1832）、ベルトレ（1748-1822）等に依頼し、優れたモチ

クリストフ＝フィリップ オーベルカンフの人生

18世紀中頃のフランスで、トワル・ド・ジュイを生み出した人物。オーベルカンフは、人として、芸術家として、産業人としての類いまれな冒険者ともいえるだろう。

苦労の若年期

クリストフ＝フィリップ・オーベルカンフは、1738年6月11日にヴェルテンベルク王国（現ドイツ）で生まれる。彼の実家はオランダ系の染色業者であった。

当時の布地染色業者は、コットン地・ウール地・シルク地などの布地に、模様を様々な色でプリントしていた。当時の模様は、インドからきた“アンディエンヌ布地（インド更紗）”をもとにデザインされていた。そのため、

当時、布地染色業者はアンディエナー（インド更紗屋）と呼ばれていた。

彼は、6歳になると家族が経営していた工場で働き始め、その後、各地を歩き来しながら、職務経験を積んでいく。そのような中、彼は次第に重苦しい家庭環境から自由になることを望むようになる。

パリとジュイ・オン・ジョザス

1758年のある日、オーベルカンフは、パリにむけて旅立つ。彼は、20歳の時、パリ市内にある工場で、染色労働者として雇われたが、働く環境はみじめなものであった。彼はほどなく、他人に従うのではなく自分の翼で羽ばたくことを夢見るようになる。

フランスでは、70年間以上（1686年から1759年）に渡ってインドのプリント布地（インド更紗）が禁止されていた。国王ルイ14世が、完全禁止令により他国との競争からフランスの産業を守りたかったからである。しかし、貴族たちは、この色鮮やかな布地に夢中になり、アンディエンヌ布地を模倣製造する違法なアトリエを守ったり、外国から入ってくる布地の密輸を手助けしていたのである。

国王ルイ15世は、宮廷や、とりわけ、寵愛するポンパドール夫人からの圧力をうけ、1759年11月9日の王令により禁止を解く。このアンディエンヌ布地の自由化は、熱意と技術を持ち合わせ

“トワル・ド・ジュイ”の代表的なモチーフ（模様）

オーベルカンフは、芸術家であり、技術者でありかつ商人であった。彼は、顧客のそれぞれの好みにあった数々のデザインを用意できる、驚くべき才能を持っていた。彼の顧客は、宮廷、貴族、ブルジョワ階級といった、比較的裕福な階層から中間階層と幅広かった。ユエをはじめとする才能ある芸術家と協力しながら、ジュイ工場は、その83年間の歴史の中で、3万点以上のモチーフを生み出した。

“トワル・ド・ジュイ”のモチーフは、大きく6種類のテーマ（自然柄、中国趣味“シノワズリ”、芸術、歴史、その時代の出来事、装飾柄）に分類できる。以下の模様は、“トワル・ド・ジュイ”の代表的なデザインである。

（＊作品保護のため、展示内容は定期的に入れ替えされますことをご了承下さい。）

◆ 自然柄

パランポール（ベッドカバー）：このインド柄は、“トワル・ド・ジュイ”に大きな影響を与え、ジュイの源流とも言える。18世紀終わり頃製作。

（写真A）

熱帯の花々：1787年製作。

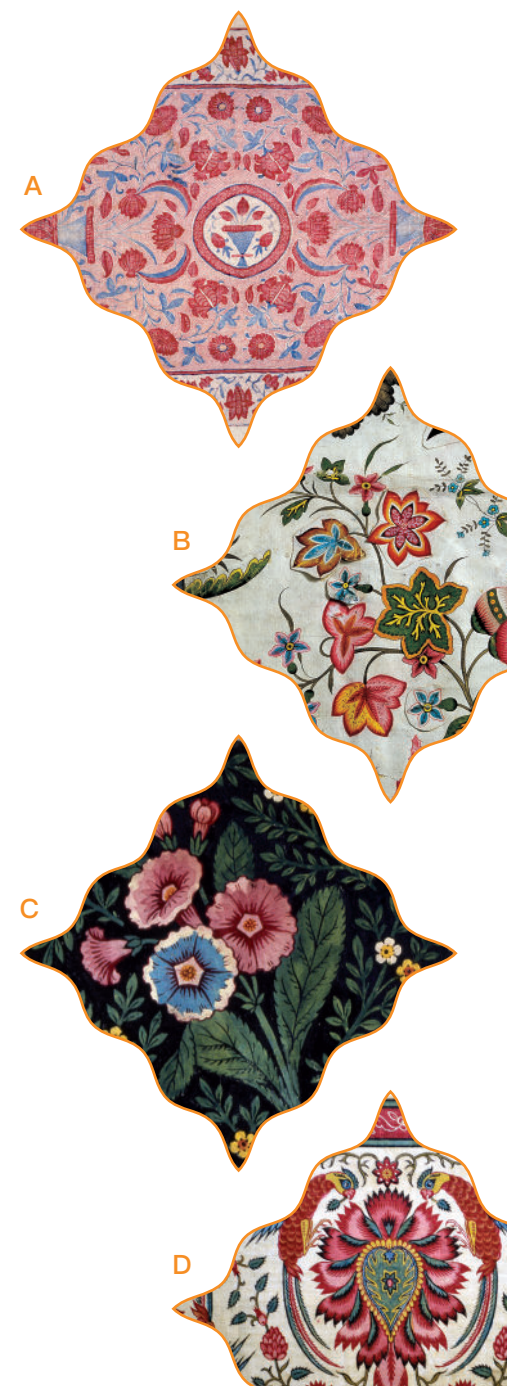
（写真B）

花模様：1803年から1804年製作。

（写真C）

オウム：室内装飾のフリーズデザインに使用された。1787年から1788年製作。

（写真D）



「オーベルカンフの肖像画」フラソワ・ジェラルール作。1819年製作。油彩画。

◆ シノワズリ（中国趣味）

風景： 1780年頃製作。

（写真E）

◆ 芸術

ラ・フォンテーヌの寓話： 有名な詩人ジョン・ド・ラ・フォンテーヌ（1621-1695）による「カラスとキツネ」の場面。1775年製作。

（写真F）

◆ その時代の出来事

以下の2つの布地は、フランスのアメリカ独立戦争への支援を表している。1778年に、軍事支援および商業同盟の2種の条約が成立したことを記念して作られた。

アメリカ独立： このジョン=パティスト・ユエのデザインは、アメリカのベンジャミン・フランクリン（1706-1790）がフランス人彫刻家のオギュスタン・デュプレ（1748-1833）に依頼した、1781年の「ヨークタウンの戦い」の勝利を記念したメダルを基にしている。メダイヨン（メダル）の一つは、ローマ神話の戦いの女神であるミネルヴァ（フランスを象徴）が、まだ幼い息子のヘラクレス（アメリカ）を豹（イギリス）の攻撃から護っている。1784年製作。

（写真G）

アメリカからフランスへのオーマージュ： インディアンの頭飾りをした女性がアメリカを象徴している。もう一人の人物は、フリジア帽（隷従から自由への開放の象徴）を棒にさして掲げている。その前で王冠を頂いた女性がフランスを象徴している。1781年製作。

（写真H）



E



F



G



H



ゴネスの気球： 初めての熱気球飛行は、地元ゴネス（パリ近郊）の住民を恐れさせ、彼らは気球を襲撃し、熊手で引き裂いてしまう。1783年製作。

（写真I）

◆ 装飾柄

イギリス風ドレス（ローブ・ア・ラングレーズ）： 1785年。

（写真J）製作

オーベルカンフ夫人のドレス： 絹地に刺繍を施したドレスで、おそらくは夫人がマリー・アントワネットに謁見した際に着用したもの。現在、日本の京都服飾文化研究財団が所有。1780年頃製作。

（写真K）

公爵夫人様式ベッドの飾り： 1797年製作。

（表紙L）

幾何学模様のサンプル： これらは、特に椅子を覆うのに使用された。19世紀始め製作。

（写真M）



I



J



K



L



M

ジュイ・オン・ジョザスの工場でプリントされたトワル・ド・ジュイのモチーフは、当時、フランスの各地の工場度々模倣され、19世紀終わりごろにはアルザスでも模倣された。今日でもトワル・ド・ジュイのモチーフは、世界中の芸術家やデザイナー、スタイリスト、室内装飾家に影響を与えている。